

「ゆかし」から「よしなし」へ：
『更級日記』の世界

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西木, 忠一 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4725

「ゆかし」から「よしなし」へ

—『更級日記』の世界—

西 木 忠 一

一

『更級日記』の作者「菅原孝標女」が、姉や継母などから物語に
関する話を聞き、「いとどゆかしさまされど……」と日記に記した
のは、その冒頭部であった。それは

あずま路の道の果てよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人、
いかばかりかはあやしかりけむを、……

と記しはじめた、上総の国においてであった。これが本日記に見え
る「ゆかし」の初例である。

本日記には「ゆかし」が十二例見える。しかも、作者十三歳の日
記冒頭から十五歳七月七日の『長恨歌』の物語を借りるに至るまで
に九例、残る三例は作者三十六歳の八月以後の一例と、三十九歳の
初瀬詣での条に見える二例である。つまり、作者十五歳七月七日か
ら三十六歳八月までのほぼ二十一年間、「ゆかし」は日記に見えな
いのである。

そこで、十五歳七月七日までの九例と、三十六歳八月以後の三例
を前・後に大別し、まず前九例をつぶさに辿ってみることにする。

本稿冒頭に示した用例は

あずま路の道の果てよりも、……いかに思ひはじめけること
にか、世の中に物語といふもののあんなるを、いかで見ばやと
思ひつつ、つれづれなる昼間菅居などに、姉継母などやうの人々
の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところどこ
ろ語るを聞くに、いとどゆかしさまされど、わが思ふままにそ
らにいかでおおぼえ語らむ、いみじく心もとなきままに、……
である。身近かな人々の物語に関わる語りを聞くにつけ、彼女はま
すまず知りたさが募ったという。

「ゆかし」については、周知のところではあろうが、ここでいさ
さか触れておこうと思う。まず、早くは清水文雄氏が

「ゆく」といふ動詞を母胎とする形容詞と見て然るべく、物

の實體を見とどけたい、それを知りたい、といふ心の志向を表す語である。^(注3)

と述べられ、また近くはたとえ『古語大辞典』(小学館)【語誌】に、動詞「ゆ(二行)く」の形容詞化した語。……対象に好奇心を抱き、心が引き付けられがちであるという主観的感情を表す。……とも見えることを例示し、次の用例に移ることとする。

孝標達二行は、作者が「十三になる年」の「九月三日」に門出し、「いまたち」に移り、いよいよ帰京の途についた。そして竹芝寺に至った時、竹芝伝説を聞いたその話の中に

「……いとあはれに、いかなる瓢の、いかなるびくならむと、いみじうゆかしくおぼされければ、……」

「……このをのこをたづぬるに、この皇女、おほやけ使を召して、『われ、さるべきにやありけむ、このをとこの家ゆかしくて、率て行けと言ひしかば率て来たり。……』と仰せられければ、言はむかたなく、……」

の二例が見える。いずれも「みかどの御むすめ」の思いであって、②は都において「火焚屋の火焚く衛士」の「ひとりごちつづや」くのを聞いた時、③は「衛士」に「率て行け」といって竹芝へ連れて来させ、あとをつけて来た「おほやけ」よりの使者に、「御むすめ」が「仰せられ」た言葉に見えたのであった。

孝標女の東国から〈都〉へという過程とは逆に、竹芝伝説では皇女の〈都〉から東国へと下っていった〈宿世〉が語られると

同時に、その東国で皇女が〈みやび〉のミニチュア世界を形成したということが語られることによって、孝標女の生きざまと皇女のそれが対照化されているのだ。そこに竹芝伝説が詳細に語られねばならない必然性があったといえよう。^(注4)

と大倉比呂志氏が述べられたが、日記成立時点においてかくも詳細に記された理由が、同氏の説明によって明白となるであろう。また、津本信博氏の

切ない程に祈りつづけた念願の京への道すがら、高貴な姫君が身分の低い衛士に身を託し、堂々と都落ちするその意志の力こそ彼女の感動があったのかも知れない。^(注5)

との推測も当を得ていよう。「地位も名譽も捨て、絶対的な権力を持つ『公』を向こうにしての、純愛の勝利の物語である」ともいえよう。

翌治安元年(一〇二二)「三月のついたち」乳母死去。『栄花物語』卷第十六(ものしづく)の経房大宰府に赴任の条に

かくてあり過ぐしもていくに、世の中今年いと騒がしかるべしと言ひのしるに、

と見えて、本年も春から夏にかけて疫癘の流行があり、作者の乳母もそれによる死を迎えたのである。作者は

……せむかたなく、思ひ嘆くに、物語のゆかしさもおぼえずなりぬ。^(注6)

という有様で、物語の興味も失せてしまったという。

続けて、侍従の大納言(三蹟の一人でもある藤原行成)の姫君も死去したと聞き、「いとど涙を添えまざる」のであった。孝標女が帰京した時父孝標から「これ手本にせよ」といって姫の筆跡を与えられたが、そこには「とりべ山たにに煙のもえたたばはかなく見えしわれと知らなむ」と書かれていた。いま、改めて見るにつけ、ますます涙を流したのである。

そんな彼女の心を「なぐさめむと心苦しがりて」、母が「物語などをとめて見せたまふ」。結果、彼女は「おのづからなぐさみゆき」、「紫のゆかりを見て、つづきの見まほしくおぼゆ」のであった。だが、その思い叶わず、

いみじく心もとなく、ゆかしくおぼゆる^⑤

ので、彼女は「この源氏の物語、一の巻よりしてみな見せたまへ」と「心のうちに祈」った

ところが、田舎より都へのぼった「をば」を尋ねたところ、その帰る時に、

「何をか奉らむ。まめまめしき物は、まさなかりなむ。ゆかしくしたまふなる物を奉らむ」^⑥

と言い、「源氏の五十余帖、櫃に入りながら、在中將、とほきみ、せりかは、しらら、あさうづなどいふ物語ども」を袋に入れて、「をば」の元から持ち帰ることになった。彼女十四歳であった。

翌治安二年(一〇二二)七月七日、

世の中に、長恨歌といふふみを物語に書きてあるところあんなりと聞くに、いみじくゆかしけれど、え言ひよらぬに……

と見えて、彼女は『長恨歌』を物語に書いたものに興味を抱いた。そこで彼女は、

契りけむ昔の今日のゆかしさに天の川浪うち出でつるかな^⑦

と『長恨歌物語』拝借を願いだした。すると、

たち出づる天の川辺のゆかしさにつねはゆゆしきことも忘れぬとの返歌があつて、持っておられるらしき人から、「お貸しいたします」との返事を得ることができたのであった。

『長恨歌』を物語化したものであろう。『源氏物語』(桐壺)に

このころ、明け暮れ御覽ずる長恨歌の御絵、亭子院の書かせたまひて、伊勢、貫之によませたまへる、……

と見えて、絵物語になされたものであろうか。但し、散佚物語である。

以上九例がひとまとまりの用例である。中で②③は竹芝伝説の語り手の言葉として、④は彼女の贈歌に対する貸手の返歌に見えるものである。④は物語に背を向けたものではあったが、彼女の身辺の状況変化によるものであって、本来的に物語を嫌い避けたものではない。他の五例はすべて作者の物語に対する思いとしてまとめることができる。確かに⑥は「をば」の言葉に見えたのであったが、そこには「ゆかしくしたまふなる」と見えて、孝標女が物語に心惹かれて

いることを「をば」はすでに聞き知っていたのであったから、五例中に位置するものとしたのである。

二

万寿二年（一〇二五）の「一月の司召」に、父孝標は国司任官をひたすら期待していたが、「かひなき」結末を迎えてしまった。だが、「かろうじて、はるかに遠きあずま」に任官したのは、それから七年後の長元五年（一〇三二）二月八日、孝標六十歳・孝標女二十五歳であった。常陸介である。

前任の上総介の任果てて帰京したのは寛仁四年（一〇二〇）十二月二日であったから、あの時からすでに十一年が過ぎ去っていたのである。

孝標は、

年ごろ、いつしか思ふやうに近き所になりたらば、まづ胸あくばかりかしづきたてて、率て下りて、海山のけしきも見せ、それるをばさるものにて、わが身よりも高うもてなしかしづきてみむ

と思ひ続けていたというのに、結局孝標女を「京にとどめて」おくことにしたのであった。

孝標は七月十三日に任国へと下って行く。「その日はたち騒ぎて、時なりぬれば、今はとて簾を引き上げて、うち見あはせて涙をほろほると落して、やがて出でぬる」ので、孝標女はただ「目もくれま

どひて、やがて伏されぬる」という有様。孝標を途中まで見送りに行った「をのこ」は、孝標が

思ふこと心にかなふ身なりせば秋の別れをふかく知らまし

と詠みしるした懐紙を持ち帰って来た。それを見た孝標女はわれ知らず

かけてこそ思はざりしかこの世にてしばしも君に別るべしとはと書きつけたのである。

八月を迎えて、彼女は太秦に七日間参籠した。

七日さぶらふほども、ただあずま路のみ思ひやられて、よしなし事からうじてはなれて、「平らかにあひ見せたまへ」^①

と祈願した。彼女は常陸へ赴任して行った父孝標に思いを馳せていて、これまでの夕顔や浮舟の人生を思い物語にうつつをぬかしていた日々の姿から、現実を目を向けるようになったわけである。つまり、物語の世界に心を遊ばせていたことを「よしなし事」と断じたのである。これが『更級日記』に見える「よしなし（事・心）」の初めである。

『角川古語大辞典』（第五巻）に

よしなし（由無）形ク ①根拠のないさま。そのことがなされる、しかとしたわけのないさま。②手がかりのないさま。手段方法のないさま。すべがない。③縁がないさま。無関係であるさま。④そのことに意義の認められないさま。無意味だ。

（以下省略）

などと見え、

よしなしごころ〔由無心〕名 つまらぬ ことを思ふ心。たわ
いもない考え。

よしなしごと〔由無事・由無言〕名

①いわれのないこと。根拠のないこと。②なんのとりえもな
いこと。たわいもないこと。③たわいもないおしゃべり。
などと示されている。こうした解を参照しつつ、『更級日記』に見
える「よしなし……」の用例を続けて眺めていくことにする。

長元九年（一〇三六）作者二十九歳である。京都東山の清水寺に
参籠した。彼女は

……錦を頭にもかづき、足にもはいたる僧の、別当とおぼしき
が寄り来て、「ゆくさきのあはれならむも知らず、さもよしな
き事をのみ」と、うちむつかりて、御帳のうちに入りぬ
と夢に見たという。参籠中の夜の夢の「別当とおぼしき」男の語り
の中に見えたが、彼女は「かくなん見えつる」とも語らず、心にも
思ひとどめでまかで「たのであった。だから、ここに見える「よ
しなき」は作者の判断ではない。

長暦四年・長元元年（一〇四〇）、作者三十三歳にて橘俊通と結
婚。俊通三十九歳であった。彼女は

さりとて、その有様の、たちまちにきらきらしき勢ひなどあ
べいやうもなく、いとよしなかりけるすずる心にも、ことの
ほかにたがひぬる有様なりかし。

とその結婚生活を記した。ぜひ物語の貴公子たちとの結婚をこそと
夢見ていたという、他愛もなくうわついたものではあったものの、
とはいえ現実あまりに彼女の願いとかけ離れた結果であった。な
お、但馬守為義の四男俊通は、帯刀長・左衛門尉・檢非違使・藏人・
下野守など任じられた。孝標女との結婚は初婚ではない。

その後、何かと雑事にまぎれて物語との関わりもすつかり遠のき、
今では

光源氏ばかりの人はこの世におはしけりやは、薰大将の宇治
に隠し据ゑたまふべきもなき世なり、あなものぐるほし、いか
によしなかりける心なり、と思ひしみはてて、まめまめしく過
ぐすとならば、さてもありはず。

と、自分はこれまでつまらぬことを考えていたのであるうと思ひ知
り、かといつて地道に暮らして行こうというものでもない、俊通
との結婚によって現実には光源氏や薰大将との関わりは起こりうる
ものでもないという現実を、一方では納得しているのである。

作者の俊通との夫婦生活には、やはりそこにかげがえのない安
息があっただろうが、のちにそれすらもうち砕かれた余生を抱
き取らされたことへの嘆きが、『更級日記』の人生の帰結であ
り、その帰結への旅路を構想するものとしてこの日記は書かれ
たのであった。

とは秋山虔氏の見事な解説である。

實徳二年（一〇四五）。作者三十八歳の十一月二十余日、彼女は「石山詣で」を執行するに至った。それは

今は、昔のよしなし心もくやしかりけりとのみ思ひ知り果て、親の物へ率て参りなどせでやみにしも、もどかしく思ひ出でらるれば、……

との思いでの決行であった。関根慶子氏は「ここでいよいよ、物語愛を、『よしなし心』と確認した」と指摘された。それは「……思ひ知り果て」による判断と思われる。彼女は同氏が指摘されたことく、ここに至って物語との完全なる訣別がはじまり、宗教へと彼女の心は確実に向かつて行く。

なお、『蜻蛉日記』中、天禄元年（九七〇）に三十五歳の道綱母参籠。七月二十日ごろのことであった。また、『和泉式部日記』長保五年（一〇〇三）に

あはれにはかなく、頼むべくもなきかやうのはかなしことに、世の中をなぐさめてあるも、うち思へばあさましう、かかるほどに八月にもなりぬれば、つれづれもなぐさめむとて、石山にまうでて、七日ばかりもあらんとてまうでぬ。

と見える。

永承元年（一〇四六）十月二十五日、大嘗会の御禊日であるというのに、彼女は初瀬参籠に出発。「良頼の兵衛督と申しし人の家の前を過」ぎ行く時、御禊見物の人等の発した言葉に、

一時が目をこやして何にかはせむ。いみじくおぼし立ちて、仏

の御徳かならず見たまふべき人にこそあめれ。よしなしかし。^⑧
物見で、かうこそ思ひ立つべかりけれ

と見え、「物見にうつつをぬかすとは、あまりに他愛のないこと」と、見物人の一人が言ったもので、作者の発言ではない。

『更級日記』中に見える「よしなし」の最後の用例である。

夫俊通の葬列を思いがけずも送り出したのは、康平元年（一〇五八）十月。「九月二十五日よりわづらひ出でて、十月五日に夢のやうに見ないて思ふこち、世の中にまたたぐひあることもおぼえず」という有様であったという。このような日々を記す条に見えるもので、

昔より、よしなき物語歌のことをのみにしめて、夜昼思ひておこなひをせましかば、いとかかる夢の世をば見ずもやあらまし。

と、何の役にも立たぬ物語や歌のことに心を向け、熱中し続けて来た若き日の自分を、今この時にして思い返すのであった。

五十余年の人生に対する作者なりの解釈を最も集約的な形で吐露したものとなっているが、内容的には老いの繰り言という以上のものではない（文学への屈折したこだわりを示しているという点で興味深いことは言うまでもないとしても）。

また、「よしなき物語歌のこと……」について森田兼吉氏は、

「よしなき」歌だといっても、『更級日記』の作者は歌を捨てたわけではないし、作品の最後も久しく訪れぬ尼なる人との歌の贈答で結んでいる。この歌を考えてみれば端的にわかるように、それだけに熱中して仏道を顧みなかったことが非難・後悔されるのであって、歌や物語そのものの否定ではない。^(注)と述べられたが、従うべきであろう。

以上、七例の「よしなし(事・心)」を確認したのであるが、作者が物語に傾倒することを今は他愛もないことに決したとする用例は①③④⑤⑦の五例であった。

二

「ゆかし」十二例中の残る三例を本節で確認しておこう。

長久四年(一〇四三)八月(但し、御物本傍注は「七月廿三日」とする)。作者三十六歳で、「源資通」との再会の条である。

祐子・禊子両内親王の参内があった。「前年十二月八日に内裏が焼亡」していたので、「両内親王参内の際の御座所は一条院内裏の東南の対屋」^(注)であったという。

さて、その夜作者は殿上における御遊びで源資通の伺候を知らず、「その夜は下に明かし」だが、そんな折に資通が彼女の遣戸口に立ち止まり、物を言いかけて来た。そこで返事をする彼女に彼は「時

雨の夜こそ、片時忘れず恋しくはべれ」と言いかける。彼女は歌を返したが、そこへ人々が来合わせたので自分の局にすべり込み、その夜彼女は里さがりをしてしまったのであった。

『ありし時雨のやうならむに、いかで琵琶の音のおぼゆるかぎり弾きて聞かせむ』となむある」と聞くに、ゆかしくて、われもさるべきを待つに、さらになし。

と見えて、この条では作者の思いは物語ではなく、資通が「琵琶の音のおぼゆるかぎり弾きて」聞かせようとの言葉を耳にし、ぜひ聞きたいと思ったとのことである。

残る二例は永承元年(一〇四六)作者三十九歳の十一月二十五日から初瀬詣での折に見える。

……言ふにしたがひて出だし立つる心ばへもあはれなり。ともに行く人もいといみじく物ゆかしげなるは、いとほしけれど……と、作者に同行する従者たちの中でも、御禊の儀式をこの上もなく見物したそうにしている者たちのことをいっている。

残る一例は、

……いかなる所なればそこにしも住ませたるならむとゆかしく思ひし所ぞかし。げにをかしき所かなと思ひつつ、……

で、初瀬詣でのために夜深う出発した作者達一行が、「宇治の渡りに行き着き」その場にて作者が「源氏物語」の「宇治の宮のむすめども」のことを思い、薫大将が浮舟をこの地に住ませたことに関

して、以前はどうしてここに住ませたのかと思つたものだと回想している。

これは『源氏物語』に関するものではあるが、その昔に彼女が『源氏物語』に心奪われていた折、不審に思つたことをいま回想するのであって、現時点の作者の思いではない。

以上⑩⑪⑫の三例は、いずれも物語に対する深い思いを表明したものでなかつたのであつた。

四

物語への強い憧れの思いを「ゆかし」と記した最終例は⑧であつた。これは作者十五歳七月七日のことであつた。一方、物語への思いが他愛なしであると表明した「よしなし」の初例は、長元五年八月・「太秦参籠」中に見えたのであつた。つまり、作者十五歳七月七日から二十五歳八月までの十年間において、作者の物語に関する思いが、「ゆかし」からその思いを拒絶する「よしなし」に変わつていったのである。これはいかなる事情による変化であつたのだろうか。日記の展開に従いつつ検討していくこととする。

治安三年（一〇二三）孝標女十六歳の「四月の夜中ばかりに火の事」があり、あの「大納言殿の姫君と思ひかしづきし猫」も焼け死んでしまい、「いみじうあはれに、くちをしくおぼゆ」のであつた。

翌治安四年（一〇二四）五月、彼女の姉が二人目の子（女兒）を

出産、そして死去してしまつた。作者十七歳である。「母などは皆亡くなりたる方にある」時、彼女は姉の忘れ形見の幼児を「左右に臥せたる」ところ、

荒れたる板屋のひまより月のもり来て、児の顔にあたりたるが、いとゆゆしくおぼゆれば、袖をうちおほひて、いま一人をもちき寄せて、思ふぞいみじきや。

ということ、^{（注）}「いわば荒涼の風趣の脚色をさえ感じさせる」条である。

万寿二年（一〇二五）の一月の司召に、父孝標は「かひなき」朝を迎えてしまつた。彼の思いが叶わなかつたのである。作者十八歳である。

同年四月には「東山なる所」へ引越した。そこは「靈山近き所」だったので参詣。「山寺なる石井に寄りて、手にむすびつつ」飲んだことであつた。

七月のある夜明け、「山の方より人あまた来る音す」るので驚いたが、見ると「鹿の縁のもとまで」近づいていたのであつた。近くで鳴く鹿の声に、彼女は

秋の夜の妻恋ひかぬる鹿の音は遠山にこそ聞くべかりけりと詠んだ。

八月の「二十余日の暁がたの月」見て、「いみじくあはれ」を感じたりもしたものである。

その後、帰京した。東山にわたつた時は「水ばかり見えし田どもも、皆刈りてはて」た状態である。

東山の尼へ贈歌。続いて継母が「下りし国の名を宮にも言はるる」ことに、父に代わって贈歌。それは

朝倉や今は雲居に聞くものをなほ木のまろが名のりをやする
であった。

以上、姉の死から継母下国に至るまでを辿って来たが、日記は次の一節が続けられる。

かやうに、そこはなきことを思ひつづくるを役にて、物語を
わづかにしても、はかばかしく、人のやうならむとも念ぜられ
ず、……

と見え、続けてこれまでの彼女の思いを、

いみじくやむごとなく、かたち有様、物語にある光源氏などの
やうにおはせむ人を、年に一たびにても通はしたてまつりて、
浮舟の女君のやうに山里に隠し据ゑられて、花紅葉月雪をなが
めて、いと心ぼそげにて、めでたからむ御文などを時々待ち見
などこそせめ

と記している。つまり、治安元年三月乳母の死に「物語のゆかしさ
もおぼえずなりぬ」と記されたものの、また姉の死や乳母の帰宅な
どによって心に打撃を受けたものの、それらは広く眺めれば「浮舟
の女君のやうに……」との彼女の思いは、細々ながら続いていたの
であった。

だが、そのような彼女の思いも一挙に変化を見せた。これまで徐々
に変化していた彼女の物語への思いが、続く父孝標の常陸介任官に
よって見事に一変してしまった。「年ごろは、いつしか思ふやうに

近き所に」との父の願いは、もの見事に捨て去られ、「夜昼嘆か
るる」父の嘆きを聞く彼女の心地は

花紅葉の思ひもみな忘れて、悲しく、いみじく思い嘆かるれど、
いかがはせむ。
というのであった。

前節の

花紅葉月雪をながめて

と、本節の

花紅葉の思ひもみな忘れて

との照応が、彼女の心の変化を表明しているであろう。

津本信博氏は父孝標について

二十五歳にもなり結婚せずにいる孝標女を残していく父孝標は、
ふがいない自己への絶望は増すばかりであったろう。^(注1)

と述べられたが、父孝標の娘を思う親心を感じさせるであろう。

『更級日記』冒頭の「あずま路の道のはてよりも、なほ奥つ方に
生ひ出でたる人」は、作者の『源氏物語』の浮舟への思いに深い関
わりを持っていた。それは

あずま路の道のはてなる常陸帯のかごとばかりもあひ見てしが
な(『古今和歌六帖』・紀友則)

を引歌とし、下二句から浮舟のイメージが強く感じられることは既
に多くの人々によって明示されたところである。たとえば大倉比呂
志氏は、

「あずま路の道のはて」という語句には常陸のことが暗示されておられ、そこに浮舟のイメージが濃厚に揺曳している点が注意されるべきだろう。^(注1)

と述べられ、また和田律子氏も

「あずま路の道のはて」という語句には常陸のことが暗示されておられ、そこに浮舟のイメージが濃厚に打ち出されているのを見落としてはなるまい。^(注1)

この指摘も見える。

さて、『更級日記』中に

⑦物語のことをのみ心にしめて、われはこのごろわるきぞかし、さかりにならば、かたちもかぎりなくよく、髪もいみじく長くなりなむ、光源氏の夕顔・宇治の大将の浮舟の女君のやうにこそあらめと……

⑧かたち有様、物語にある光源氏などのやうにおはせむ人を、年に一たびにても通はしたてまつりて、浮舟の女君のやうに山里に隠し据ゑられて、……

などと見えて、若き日の彼女はひたすら『源氏物語』の夕顔や浮舟に憧れていた。ところが二十五歳にして父孝標が常陸介に任せられた結果、彼女は常陸介女に近づくことになったというのに、彼女はこの時を以って確実に『源氏物語』への憧れを「よしなし」と断ずるに至ったのであったとは、人生の不可解さを思わざるを得ないであらう。

(注)

(注1) 本文引用は、新潮日本古典集成『更級日記』(秋山虔校注)によった。

(注2) 『女流日記』(一九二頁)

(注3) 『平安時代日記文学の特質と表現』(二二三頁)

(注4) 『更級日記作者 菅原孝標女』(六八頁)

(注5) 堀内秀晃氏・校注古典叢書『更級日記』(明治書院・二二七頁)

(注6) 注1参照『(一三一)〜(三三三)頁』

(注7) 講談社学術文庫『全訳注 更級日記』(下)(七七頁)

(注8) 『更級日記』の多層的構造をめぐって「中古文学」第三

十一号・昭和五十八年五月(五二頁)

(注9) 『日記文学の成立と展開』(二九〇)〜(二九二頁)

(注10) 注1参照(八五頁)

(注11) 注1参照(四四頁)

(注12) 注4参照(二五〇)〜(二五一頁)

(注13) 注3参照(二二九頁)

(注14) 『日記文学事典』(勉誠出版・一四七頁)